

日本をキリストへ 協力

「日本をキリストへ」
伝道団体連絡協議会

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1
TEL 03-3291-5035 (総動員伝道内)
www.gospeljapan.com/dd/

「パンのかたまりが一つ」

伝道団体連絡協議会 会長 村上 宣道



たった三百人とい
う少数者であったギ
デオンの手勢の前に
は、ミデヤン人とア
マレク人とが、「い
なごのように大勢谷
に伏して」陣を張っ
ていた。そんな時ひ
とりの者が次のよう
な夢の話をします。
「大麦のパンのかた
まりが一つ、ミデヤ
ン人の陣営にころが
つて来て、天幕の中
にまで入り、それを

打ったので、それは倒れた。ひっくり返って、天幕は倒れてしまった」という。すると仲間が「それは神が彼（ギデオン）の手にミデヤンと、陣営全部を渡されたのだ」と解釈した。事実、その後、ギデオンの三百人は完全に敵に勝利したと、士師記の七章に記されている。

ミデヤンの大軍を打ち倒したのは「大麦のパンのかたまり」であったという夢の話は暗示に富んでいる。「大麦のパン」と言えば、五旬節の日にはパンを供えているようにと命ぜられていた。その五十日前には初穂の束がさげられていた（レ

ビ記）。新約におけるペンテコステが教会の誕生の日となったことから、その日には麦が束のままではなく、それを粉にして一つのかたまりとしてのパンがさげられたことに、そのパンが教会を象徴しているようにも読めて興味深い。

この頃しきりに思うことは、日本の教会が世に対して非力無力なのは、教会が一つのかたまりになっていないからだろうなということ。残念ながら、日本のクリスチャンの数も教会も、極少でしかないのに、それがみんなバラバラで全くまとまりがないのだから、世に対して全くその存在感をアピールできないというのも当然と言わねばなるまい。

乱立とでも言いたくなるような数え切れないほどの教派・教団そして単立の数々、それに各種伝道団体。多種多様で「みんな違ってみんないい」と聞こえはよいが、外側に対しては何とも分かりにくく説得力に欠ける。何とかもう少し、お互いの与えられている賜物や能力、財なども結集して、一つの「パンのかたまり」になれないものだろうか。そうすれば、あの「パンのかたまり」がミデヤンの陣営に打撃を与えたように、たとえギデオンのように少数派であったとしても、もっと大きなインパクトを与えることができるはずだが、と考えるのは単なる夢なのだろうか。これを単なる夢で終わらせないために、どうしたら一つになれるか「教会会議」のようなものが開けたらと思う。まず「パンのかたまり」になる前には、それぞれが砕かれて「粉」になる覚悟があつてのことではなければならない。

このために伝道協としてできることは何なのかを共に探っていきたい。

伝団協一泊研修会



十月二十日(月)〜二十一日(火)の二日間、湯河原厚生年金会館にて一泊研修会が開催された。昨年の秋の研修会(講演会)で講師としてお招きして好評であった水谷恵信先生を再度お招きして「人生を立ち直らせる実践の聖書の読み方」をテーマに三十一名が集い、現代社会が抱える暗い部分に光を照らすような熱い講演と恵みに溢れた二日間であった。

生とともにデポーションをしましたが、先生の聖書の解説や参加者の相談に対するアドバイス等、分かりやすく面白くて、惹きつけられてしまい、すっかり目も覚め、あつという間の二時間でした。もつと続けたいと思つた程でした。

二日目の午前中は質疑応答の時間でした。ともにデポーションをしたせいとか、お互い初対面の方も多かったのですが、信頼感が生まれ、率直な意見や感想、質問が多く出されました。その一つ一つに水谷先生は聖書を引用して、また日常生活の中の様々なたとえで楽しく分かりやすく答えて導きを与えて下さいました。参加者の数だけ考えて方や質問も違つていましたが、デポーションによって訓練されて神様をよく知つておられる先生は、どの質問にも詰まることなくあらゆる角度から、神様の恵みを示して下さいました。信仰に満ちた適切なアドバイスと励ましで、参加者の不安やとまどいも取り除かれました。

先生の恵みあふれる講演、私たちの心をしっかりと神様に注目させるデポーションの導き、エネルギーギッシュな生活のお託を伺い、聖書には力があり、主との交わりはすばらしい恵みを与えて下さるものなのだと感じました。このような有意義な研修会に参加させていただいたこと、また新しい交わりも与えられて、心から感謝しております。水谷先生のひきこもりの若者に対する愛の働きが、ますます主に祝福されることを祈りつつ。

黒木順子

「聖書ってこんなに分かりやすかつたんだ!」
今回、伝道団体連絡協議会主催の一泊研修会に参加させていただき、本当に多くの恵みいただきました。また、私自身のデポーションに対しても、とても良い指針を得ることが出来ました。

十月二十日、二十一日の二日間にわたつて、「人生を立ち直らせる実践的聖書の読み方」というテーマで水谷恵信先生をお迎えしての研修会でした。水谷先生のごことは、とても深く神様と交わつておられる恵みを実生活に生かして周囲の人に祝福を及ぼしておられる素晴らしい先生だと聞いていました。が、直接お話を伺つて、先生と神様との交わりの深さと聖書の知識の広さに驚いてしまいました。

一日目に、聖書の読解力を高めるための講習がありました。ただ読むのではなく、神様に属することと、サタンに属することの二つに分けて読んでいくと、文章がすつきりとし、何が語られていくのかをつかみやすくなるということを教わりました(赤と青のペンで色分けして線を引くと見てすぐわかるということです)。早速、デポーションに取り入れていますが、聖書ってこんなに分かりやすかつたんだ!と感心してしまいます。

二日目は早朝五時から七時までたっぷり水谷先



「キリストが私を捕らえて」

自分は何のために生きるのか、人生の目的を確認したくてこの一泊研修会に参加しました。クリスチャンの集いに顔を出すのは久しぶりでした。クリスマスチャンにとつて聖書とつき合うことは重要であるが、今回の研修会に参加して、聖書に「読み方」があるのを知り、自分はいかに漫然と読んでいたかがわかりました。ポイントとは、まず自分の価値観から離れ、聖書の倫理に従つて聖書を読み、そして本文をできるだけ図式化し、聖書の各章の構造をつかむことが大切である。その上で聖書の構造をつかむの思い、嘆きを知るのです。研修会の「実践」の場では、自分が聖書から具体的に何を学んだのか、そして各々の信仰の基本的なあり方が問われました。

現在、私は進むべき道を失つています。日々、主にどう生きればよいのか問い続けています。水谷先生によれば、今、信徒が求めているのは「福音にすべて身を任せてほんとうによいのか」という確証だと言われます。イエス・キリストのご人格に全面的に信頼しているかという事です。口では「主にすべてをお委ねします」と祈つていても、そのような確証はまだ私には与えられていません。そして水谷先生は、自分の人生の場において闘っているのはイエス・キリストであり、自分が困難と闘っているのではない、とも言われました。私がイエス・キリストを捕えなくても、すでにキリストが私を捕えているのです。主がどのように私に働きかけているのか、私はまだ気付いていないのかも知れません。

現在、自分が腰を落ち着ける教会を探していますが、まだ見つかつていません。けれどイエス・キリストを信じる信仰だけは止めていません。主との横の関係を破れてもキリストを主に信じ、人とともに今は歩んでいます。主イエスを完全に身を委ね、主の命令に従い続ける水谷師の働きに触発された二日間でした。

島田賢司

「原点に立ち返つて」

研修会参加の目的は、私の信仰姿勢の見直しでした。研修を通して水谷先生は「聖書は神の側から読み、その心を読み取れ」と絶えず語られました。

た。神様は私に何を語られているのか、その心を汲み取り、心を傾けた二日間でした。早朝のデボーションで「パウロと同じ思いでキリストを愛することからクリスチャン生活が始まることを是非ここでつかんでほしい」との水谷師の言葉が印象的でした。また、参加者から「信仰をもつには」の質問に対しては具体的な事例を語られ、質問者が納得できるまで懇切な説明をされました。信じるにはイエス・キリストに全身を預けることであり、「君の命はもらった」と言われたら「ハイ、主よ」と心から言えるかが問われていることです。また、「私は信仰が弱いから」との質問者からの発言に対して「究極的にはキリストを信頼していいから」と先生が言われたとき、私はこのやりとりをキリストは今どんな心で聴いておられるか、を考えていました。ヨハネやペテロのように主のご人格に直接触れ、息づかいを感じ、その涙を見る時、「私は救い主をはっきり知っている」と言えます。参加者から、それではどうしたら私は救い主の本質を知ることができののだろうか、との質問があり、先生は「一緒に住んでみて、危機場面をともにする時、ご主人の本質や人格の確かさを体験し、その人柄を知っていくのです。同じように人は試練を主とともに担うことを通して、主は私たちを最大限に開花させて下さるので、これがパウロの走り方だと聖書は提案しているのでです」との水谷先生の言葉は大変印象的でした。また、「クリスチャンの人生は主が全責任を負って下さる。この主に全幅の信頼を寄せ、折ることによってどんな困難をもキリストの命になくことで回復する。キリストは福音で勝負された。困難はそのまま引受けて福音で勝負するように」と総括されました。

金子尚子

伝道団体連絡協議会

機関紙「協力」五十号記念特集

●機関紙「協力」五十号を記念して

姫井雅夫



一九八五年に三十五団体の加盟をもって「伝道団体連絡協議会」が発足しました。初代の会長・本田弘慈師は「日本の伝道の歴史に新しい一頁を加えた」と言われました。その本田師は二〇〇二年九十歳で召されました。伝道団体が「一致と協力」を主眼にしているのはピリピ書一章二十七節の聖句によりま

す。教会にはいろいろな教派があり教団が存在していません。時には教会間に亀裂が生ずることがありますが、伝道団体間にはそのようなことはありません。と、超教派です。から教理的なこと議論することがありません。しかし教会と伝道団体の間には十分な理解がなかった時代がありました。伝道団体は教会から人材を求め、献金を集め、集会を企画しては教会の人々を動員している「コバンザメ」ではないかとの意見が出たほどでした。教会の言い分も理解できません。伝道団体がそれぞれに多くの企画をし、教会に呼びかけてきます。「交通整理」が必要だ、との意見が出たのもそのころでした。

日本のキリスト教界に対して教会の意見は大きく反映されていますが、超教派の伝道団体はどこか隔つことに迫りやられていくような感じでした。ピリー・グラハム国際大会が開かれた時も、「教会による、教会のための、教会の働きである」という言葉が多く用いられました。ピリー・グラハ

ム伝道協会は伝道団体です。日本にある多くの伝道団体が協力して推進しました。でも「教会」の働きでなければならぬとの主張の中で陰にたつて奉仕していました。伝道団体連絡協議会が発足した当時、日本福音同盟の総務をしておられた岡村又男師は、日本の福音派の教会が成長していった理由を次のように挙げています。一、聖書信仰、二、伝統にとらわれない、三、伝道団体との協力。そして伝道団体に対して、一、聖書信仰であってほしい、二、教会の手足の働きであってほしい、三、教会を立て上げる働きであって欲しい、と言われました。このようにして諸師の指導をいただきながら伝道団体連絡協議会は少しずつ具体的な活動をできるようになりました。

そのひとつとして、伝道団体の交わりと働きの紹介のために「伝道団体フェスティバル」を企画し、OCCビルで第一回を実施しました。その頃には加盟団体も十増えて四十五になりました。フェスティバルに関しては浅見氏に回顧していただくとして、行なってきた他の活動を紹介します。

五十号を迎えた機関紙「協力」の発行。お互いの働きを知り、折るためにこの機関紙は今も発行され有効に用いられています。毎年二月くらいに「情報交換会」をしてきました。顔を含ませるところに大いに意味があります。その年に企画していることを分かち合い、折りまます。一緒にやれることがあれば、それが出来るように声を掛け合います。現在はそれをさらに進めて、各団体の事務所を回って訪れ、スタッフに会って歴史や目的、祈りの課題を聞いて交わりを深めています。

秋には「一泊研修会」をしています。伝道団体として共通の学べきことがあります。それらを出し合ってテーマを決め、講師を選定して学びのときを持っています。伝道団体の事務所が関東に多いので、地方に事務所を持つ団体の参加が難しいことが残念なことです。

伝道団体連絡協議会が発足してから、日本福音同盟でも伝道団体を協会員として加盟させるようになりまし。伝道団体の声が日本のキリスト

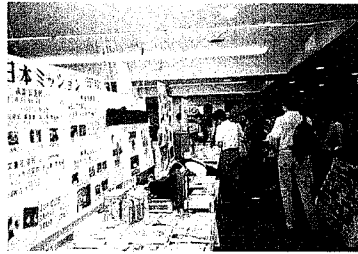
教界に少しでも反映できるようになったことは大きなことと思っています。

発足してから十八年になりますが、脱退した団体、活動を停止した団体があります。経済的な問題が一番大きいと思います。今後とも互いに助け合い励まし合って、宣教の業に取り組み伝道団体連絡協議会であり続けたいものです。

●「日本をキリストへ」

伝道団体フェスティバルの歩み

浅見鶴蔵



して進めることにした。

一、伝道団体と教会の理解と提携。

二、伝道団体相互の理解と協力、支援。

三、全同胞の救霊に貢献する、等が確認された。

日程 一九八八年六月十二日(木)～十五日(日)

四日間

会場 OSCC 八F大チャペル、八Fエレベーターホール、九Fギャラリ、会議室、北館一三 小チャペル、二二三A 二二三B 二二三C 四一七 四一八 四二〇

内容 展示、セミナー、講演会、音楽会、特別プレゼントコーナー、喫茶コーナー、

組織 実行委員長 姫井雅夫、実行委員長補佐

多胡元喜、企画委員 常任役員 鈴木留蔵

事務局 鈴木優子 玉田三枝子 財務 鈴木留蔵

久保英夫 仲村 甚

經理 渡辺佐次朗、展示 浅見鶴蔵 荒牧嘉文、

催物 岩崎喜太男、会場 世良田湧侍

リクルート 多胡元喜、藤井 彰

参加団体 三十四団体、参加人数 一五〇〇名余、

総費用 三三〇万円

小さな伝道団体も支援されて、参加できるように配慮し、力のあるところだけが参加できるようにしたものではないこと。当初から良き配慮を持って進めてきました。

第二回 八八年六月十六日～十八日の三日間 OSCC

フライデーナイトと合同企画で四十七団体の参加で「真実のふれ愛」を

テーマにし、各コーナーは各参加団体の責任において受持つて一九八七年「世界

青年伝道年」に合わせて、ユース・セ

レブレイションをOSCCで開催。

第三回 八九年十月七日 一日フェスティバル

OSCC

第四回 九〇年 六月二十二日 一日フェスティ

バル OSCC

第五回 九一年 六月十四日～十五日 OSCC

第六回 九二年 五月二十七日 岡山牧師会・山陰牧師会の協賛を得て、また、岡山の岡

南教会の全面的な協力により、地方においての試みが大成のうちに終了しました。

第七回 九三年 六月十一日～十二日 OSCC

第八回 フェスティバル・イン・神奈川 カンパ

ーランド・高座教会で一日フェスティ

バルを教会にご協力をいただき、多くの参

加者に伝道団体の働きを十分に案内する

ことができました。

第九回 九五年 十一月二十日～二十二日 東海

宣教会議Ⅲが愛知県労働研修センターで

開催され、協賛参加し、中京地区の皆さ

んに初めて案内ができました。

第十回 九六年 五月二十四日～二十五日 OC

第十一回 九七年 十一月八日 一日フェステ

バル 川越べべホール 埼玉北西地区

牧師会のご協力のもとで、クリスマス

を兼ねて開催されました。参加団体の

力を入れたフェスティバルでした。

一九九八年～二〇〇三年まで残念ながら開催され

ていません。今後の開催を期待します。

伝道団体訪問ツアー

日本飢餓対策機構 (JIFH) 東京事務局

参加者：渋沢 (国際ナビゲーター)、萩生田 (いのちのことば社)、稲葉 (福音主義医療関係者協議会)

十月二日(木)、地下鉄丸の内線中野新町駅に待ち合わせ、今回の出席者が三人のみであることを確認する。ちよつとさびしい感じ。徒歩五分くらいで目指す事務所に着く。神田総主事と柳沢姉、須山姉の三人が迎えて下さる。簡単な



簡単な

第一回のフェスティバルの開催は、一九八六年一月十四日お茶の水キリスト教会館 (OSCC) の実行委員会が始まりました。当初のメンバーは会長・本田弘慈師、副会長・羽鳥明師、マクビティ師、原 登師、実行委員長・姫井雅夫師、委員・菊池良市師、大竹一行師、世良田湧侍師、仲村 甚、久保英夫、多胡元喜、荒牧嘉文、市村和夫、岩崎喜太男、浅井仁朗、藤井 彰、浅見鶴蔵の各氏。

本田弘慈師の最初のメッセージ・申命記十一章十二節「一年の初めから年の終りまで、あなたの神、主が、絶えずその上に目を留めておられる。一、聞き従い、二、愛し、三、仕える。この三項目の力強いメッセージをいただき、これを基本と

自己紹介のあと、早速神田総主事から日本飢餓対策機構の概要を説明していただく。三十年前、一人の姉妹の思いから出発し、国際飢餓対策機構(FHI)との協力が始まり、理事会組織を整えて、現在は理事十名、評議員九名、国外ワーカー約二十名、国内スタッフ二十三名という大きな組織に発展してきた。現在四千の教会、三千の団体(学校やユースクラブなど)、三万五千人の個人にニュースを流している。

特徴についてまとめた印刷物をいただいたので、その見出しを引用する。

一、国際協力NGO (Non Governmental Organization)・・・非政府・民間援助協力団体)です。

二、社会的弱者に焦点をあてた働きをします。

三、活動の動機は？(キリストの精神に基づく)

四、全人的な働きを目指しています。

五、現地に人を派遣して活動します。

六、直接的な支援をします。

七、資金源は一般市民の方々に求めます。

八、できるだけ多くの割合を事業費で用います。

九、透明性の高い会計処理を行い、それを公表しています。

十、活動の内容

(ア) 海外においてa)緊急援助、b)自立開発協力、c)子供への教育支援

(イ) 国内において、啓発・教育活動

十一、活動の地域

アジア十三ヶ国、アフリカ八ヶ国、中南米五ヶ国など

十二、NPO法人格について

検討中で、現在は取得していません。

神田総主事の話が少し追加する。公立学校の集会所に招かれる機会が増えているが、イエス・キリストの名前を出さなくても聖書の教えを大胆に語る事ができていることを感謝している。どんな話をするかという点、日本の食糧事情が安定しているのは、どんな条件があるかと問いつける。神田師は二つの条件であると分析する。一つは貿易黒字であり、もう一つは戦争に巻き込まれていないことである。しかし、この二つとも、外国との関係が悪化すれば、ただちに消えてしまう状況である

ことは、誰も知っている。日本にも飢餓はやってくる可能性がある。これを防ぐには、「人にしてもらいたいことを、他の人にもそのとおりにしなさい」という聖書のゴールデンルールを守るしかない。孔子の説く「己の欲せざるところ、他人にほどこすことなかれ」というシルバールールでは飢餓は防げない、と結論に導く。自己中心からの解放こそ飢餓対策の基本であり、福音の真髄であると語られた。

その後質疑応答のあと、恒例の祈りのひとときを全員で持ち、あつという間の三時間であった。次回さらに多くの方が参加されることを期待しつつ。(記・稲葉 裕)

伝道団体紹介

「クリスチャン文書伝道団」

(CLC BOOKS)

中野 寛

クリスチャン文書伝道団の始まりは一九三九年、イギリスで創設者ケネス・アダムスがコーチエスターで小さなキリスト教書店を開いたことでした。一冊の書籍により信仰に導かれたことが、彼をそのように導いたのです。その後、同労者のビジョンに刺激され、イギリスから世界へと広がっていき、今現在では五十四ヶ国でその働きが行われています。

クリスチャン文書伝道団(以下CLC)の目的は「読んだ字のごとく、「福音」を文書という「土の器」に入れて、人々に手渡すこと」です。「あらゆる国の人々を弟子にしなさい」というキリストのご命令に従い、キリスト教文書を福音宣教と教会形成のための強力な神与の武器として用いるとCLCの国際規約には規定されているところとす。

世界のCLCでは、その国々に合わせた文書伝道がなされています。イスラム圏では、キリスト教書籍がありませんのでトラクトを作成し、頒布するところから始まりです。また多くの民族が混在する国では同じ書籍でも、何種類もの言語で

翻訳しなければなりません。出版や卸を主に活動している国、外販(車で教会等への販売に何%)を主にしている国、また、宣教師として多くの人材を他のCLCへ派遣し、サポートしている国など、実に様々な形態の働きがあります。その状況もイスラム圏などでの働きには常に迫害があったり、政治が不安定な国では強盗などの被害もあり、経済的に苦しい中、働きを続けている国もありま

す。日本でのCLCの働きは戦後混乱の最中の一九五〇年、イギリスからの文書伝道師R・オーラム師に始まります。全くのゼロからのスタートでした。日本に来ていた宣教師や神学生に輸入した洋書販売するカタラ、トラクト作成や福音文書出版、そして販売までをすべて自分たちでしていた状況だったそうです。各地へトラクトを配布し、リアカーに本を積んで販売して回ったそうです。日本人初スタッフである河井清治氏は大変な苦勞をなされたこと聞いています。英語のわからない河井氏と日本語のわからないオーラム氏とのコミュニケーションはそれは大変で、絵やジェスチャーで意志の疎通をとっていたそうです。

書店としては一九五二年、仙台に第一号店としてオープンしましたが、経営センスのなさにより、間もなく閉店してしまいました。その後、京都、お茶の水、広島、札幌、岡山、熊本、名古屋、新宿、金沢、新座、秋田、横浜、さらにはハワイにまで出店を展開していきました。経済的な問題により閉店を余儀してしまっただけでもありますが、今では日本で十店舗を構え、外販を中心に教会・牧師先生・信徒の方々のご協力とお祈りに支えられ、福音宣教・教会成長や発展のために働きを続けてまいりました。教会に仕えることにより、間接伝道といえ福音を宣べ伝えることができることを感謝しております。

昨年からは通信販売部を設立しました。普段なかなか書店に行くことができない人々、近くにキリスト教書店がない人々にキリスト教書籍・CDなどの情報を提供し、通信販売を利用していただくことと主旨で始まり、現在では多くの会員の声に大いに好評を得ております。多くの会員の声を大事にし、内容の充実を図りたいと思っております。書店の働きは年々この経済の中、試練の道を通



つていますが、神様のお守りと導きにより継続することができました。これからの数年間、CLCでは世代交代の時期を迎えます。日本における文書伝道の働きを今一度確認し、時代に合ったそして明確な伝道としての働きをすることができるよう、み言葉と祈りをもって臨んでいきたいと思っております。

「伝団協」加盟団体「ニユース・フラッシュ」

● OCC

フライデーナイトは毎週開催されています。特筆すべきイベントは、十月二十七日夜「ブレイスコンサート」の公開リハーサルでした。OCCのアイリーンホールで新しく生まれた賛美が紹介されました。フライデーナイトにお出かけ下さい。小さなのちを守る会

● 伝道用マンガ「小さなのち」がE・COMI

Cから発売されました。個人で二十冊、五十冊とまとめて買われる方々もあり、伝道に用いられています。時代に即した伝道用トラクトですので、各伝道団体でぜひお使い下さい。CCC (キャンパススクールセード)

● 今冬、平和をテーマにしたピース・オブ・クリ

スマスをY・W・A・Mなどと協力して企画、路上で伝道的CD・ROMを配ったり、展覧会、映画界、コンサートなど文化活動を通して平和を訴え、キリストにある平和を伝えます。

● 日本ミッジョン

超教派として日本全国にキリストの福音を通して、人の新生を第一に望み、使命としてきました。今後も時代にそった必要性を見だし、文書、視聴覚伝道、諸教会奉仕、英会話教室等を通して、多くの人々の魂が各教会につながりますように。

● 総動員伝道

十一月六日、八日、再度三重県多度町へのトラック配布に挑戦しました。七月に北勢町の四千件配布に続くものです。間もなく千葉西(浦安市、市川市、船橋市、習志野市)総動員伝道がスタートします。

● 日本伝道者協力会

来年四月に一日研修会を予定しています。講師はNHKの川平朝清氏。テーマは「人の心を捉える話し方」です。お祈り下さい。

● 日本聖書協会

スタディ版聖書四福音書を十二月五日に出版しました。内容はわかりやすい聖書解説で、聖書の内容をさらに深く、広く理解していくために用いられますように。

● いのちのこば社伝道グループ

新しい年もそれぞれの部門の働きが主に導かれ、文書やメディアを通して多くの人々に福音を伝えることができますように。

公 示

情報交換会のお知らせ

日時：2004年2月2日(月)

15:00~17:00

場所：OCCビル

(お茶の水
クリスチャンセンター)

713号室

※各団体1~2名の参加をお願いします。

(伝道団体連絡協議会とは)

キリスト教界には大きく分けて二つの分野があります。キリストの十字架の血によって罪赦された人々の集まりとしての「教会」と、クリスチャンになった者たちがそれぞれの使命をもって専門的な分野で伝道活動、福祉活動などをしていく「伝道団体」です。この二つはともに協力し合って神の福音を伝え、神の国の拡大に務めています。教会と伝道団体はともに助け合う必要があります。伝道団体がバラバラに活動していたのでは教会にとっても協力しにくいし、伝道団体相互にとっても力にならうと「伝道団体連絡協議会」が生まれました。現在約四十余の団体が傘下にあります。

発行日

二〇〇三年十一月二十日

発行者

村上宣道

編集者

萩生田 充